

中野仲安

初春や故郷の山凜として
春の野に萌え出づる草緑増す
蠟梅や神戸の悪夢覚めやらず
校庭をわがものの顔に舞ふつばめ
夕立に軒先借りて傘借りぬ
朝顔のつる軒先に迷ひけり
人の世に迷ひ続けて鰯雲
稲妻にをののき思ふ9・11

秋深し来し方道を思ひつつ
山峡の夜のしじまに月凍る

「雑感」

この歳になつて俳句をやるとは思つてもいなかつた。正に六十否七十の手習いである。学友達と会つて酒を飲むだけでは能がない、少し頭の体操でも始めたこの会も良き指導者に恵まれたお陰で立派な会に育つたと思つてゐる。

会後四年になるわけである。早いものである。二ヶ月に一回であるから発句兼題を眺めながら句を作る苦勞は相変わらずであるが、出来上がつた句が会でどうかなと思つた句が高い評価を得たり、苦しみ、もがきながらこれはよく出来たと思つて出したものが一票も入らないなどということはよくある。

上達するためには多くの句を作ることだとは分かっているが、相変らず次回のためには多くの句を作つて終わりとしている自分が情けない。